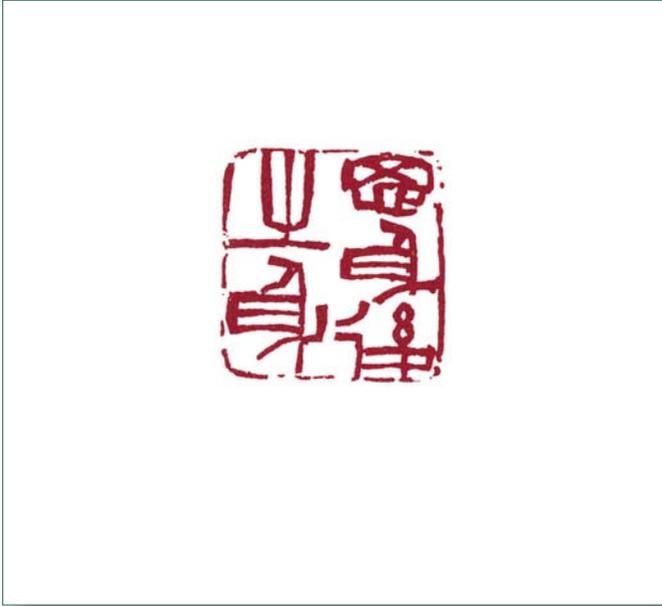


あそ 3
2009





思身後之身

保多孝三著『柞廬印存』(一) より

菜根譚の

**棲守道德者、寂寞一時、依阿權勢者、淒涼萬古、達人觀物外之物、
思身後之身、寧受一時之寂寞、毋取萬古之淒涼**

の一節。読み下しは、

「道德に棲守する者は、一時に寂寞たり。權勢にへつらふ者は、萬古にぞつとするほどさびしい。達人は物外の物を觀、身後の身を思う。寧ろ一時の寂寞を受くるも、萬古の淒涼を取るることなかれ。」

作品は余白をたつぷりと取るも間延びせず。木訥な書体と相俟つて見飽きない。一時流行った「清貧」といふことばを思ひ出した。「身」の字のお腹が突出している姿が私に似てみてとくに親近感をいだいた。

あを

三 月



四方の春

本三宮前

佐藤喜孝

四方の春ひとつ年とる一億人
初夢か拳ほどこいてやりにけり
魯穂のしらじらとある二日かな
シフォンケーキ八切枯野のひろごれり
子守唄いつも揺れぬる象花子

元朝

さいたま

早崎泰江

元朝のあらひ浄めし空があり
金星と月離れゆく冬の旅
貝塚の枯木くまなく夕映ゆる
しやりしやりと音たててゆく寒の風
慈姑掘る媼に料理教はりぬ

福笑 お達者クラブ女増え
福笑 まづ自己紹介歳も言ふ
福笑 じゃんけんの輪に陽のさしぬ
福笑 膝いたはりつのり出せり
福笑 それから都々逸炭坑節

町屋 藤野寿子

帽子美人

春浅し帽子美人と言はれけり
鬼遣らひまた温めて笙の笛
楽屋より一番太鼓地虫出づ
ばらばらな顔あつまりて梅ひらく
裏霞越乃寒梅二月尽

新宿 堀内一郎

新宿 森山のりこ

この庭にやうやく春の兆しあり
早々と梅の香届く芝に立つ
臘梅の香りにしばし身をかがむ
はからずも千両万両咲き揃ふ
何事もなきかの顔で福寿草

羽根つき

上高田 森理和

祝ひ箸何事も無く皆揃ふ
学校に子の抜く大根果実めく
羽根つきのをみな笑ひ響きけり
薄氷の上に氷片飛散せり
大寒や鼻先被ふ術知らず

不況なり色の深まる竜の玉
年新た小さき庭に夫と立つ
霜柱持ち上げられし庭の苔
咲く前に頭を垂れし水仙花
冬萌や空の青さをつとに受く

大宮 山莊慶子

父の忌の赤き梅の木咲きにけり
父母在らぬふるさと淋し宵の冬
ふるさとの薬缶鳴りをり寒紅梅
アイロンを蘭に向け置く十二月
冬の笹さらさらさらと鳴りやまず

本三西 吉成美代子

初

初朝の寢息のうすきひととゐる
初市や肩胛骨はのどかなり
ゆるやかに飛翔のつづく初雀
硯海の面おもにひろぐる初日かな
徳利の尻をささへてお正月

本三宮前

吉弘恭子

初 富 士

しまひ風呂窓を掠めて星流る
初富士や寒林梢を明るうす
冬ざれの路上に踏めり青葉くづ
閑庭に焚ける枯菊ほの匂ふ
年消ゆや夜の思惟もなく仰臥せり

鹿手袋

渡邊友七

旧新橋停車場

清瀬 赤座典子

寒風の広場でものを聞かれけり
凍て厳しお召列車の金の文字
出土せる大き土瓶や雪催
スメタナの我が祖国聞く宵の年
傘寿です今年限りと年賀状

初日

名古屋 王 岩

地図持たぬ旅人迎ふ初日かな
初御空たゆまず牛の歩みかな
美しく山河の光る初景色
けふの町春着の匂ふ人ばかり
今朝の春白髪の見ゆる鏡かな

霜

影武者の小脇差かな霜零
白梅や老斑かくすこともなし
雨脚は梅の小花に口ごもる
捨て鉢に朝霜しかと下りにけり
霜晴や母の見せたる手術痕

向島 遠藤 実

百八つ煩惱祓ひ淑気かな
海上に白き満月松七日
白鳥眠る渺渺と海昏みたり
冬の波奔りて寄せて崩れけり
鴨翔ちて凍て空白み初めにけり

逗子 鎌倉喜久恵

新橋吟行く

停車場てふことばなつかし冬日中
熱爛や四十二階のビストロに
冬空のかすかな色のさまさまに
腓寒く螺旋階段降りて来し
梅一輪二輪日曜オフィス街

川崎 木村茂登子

打ち解けて新妻笑ふお正月
ていねいに物言ふ職人冬帽子
忙しさを楽しんでゐる松飾
螺鈿の如き鱒捌きをり小正月
俯いてお尻ふる猫日向ぼこ

白金 齊藤裕子

銀座 篠田純子

大寒のエスカレーターのベルトに手
オバマ就任大合唱の白い息
セーターを着せられ水子地藏かな
藪柑子ふいに心を打つ言葉
根菜を娘と刻む春隣
燈台前号正誤鬼の禪姿冬の池

いつも来る雀なれども初雀
時計気にしつつ遅るる初句會
初わらひ笑った譯を忘れけり
賀客あり饒舌のわれありにけり
みそさざい氣ばかり若き八十八

千駄木 芝 尚子

宝仙寺前

芝宮須磨子

不透明世相そのまま去年今年
老いどちが頬桃色に明けの春
北風や意志あるごとくレジ袋
三日はや終日寡黙にハーブティ
除夜まゐり本堂までの豆灯籠

ある角度

輪島

定梶じょう

焼薯の屋台に塀の高きこと
停留所子が頬かむりしてもらひ
真っ向に全き初日ちから湧く
雪女郎守衛の仮眠深くなり
遠火事に秒針光るある角度

水仙に光やさしき城ヶ島
北側の千両黄の実なりにけり
片言の孫追ひかけて去年今年
今年もねべランダからの初の富士
桃色の毛糸コロコロ六畳間

所沢 須賀敏子

山茶花や父母居らぬ里遠くなり
父植ゑし山茶花垣も今はなし
寒雀顔より大きパンの耳
火の用心大人に合す子らの声
海草のいろさまざまに冬の浜

本三西 鈴木多枝子

三崎口

浦和 竹内弘子

曲物まげのごとき光沢つやもて冬木かな
着岸す白堊のごとき鮪船
トロ箱がとんでゆくなり三崎の冬
アロエ咲き小春といへど身を刺す風
海昏れて裸眼に滲む冬の月

無銘

田端 田中藤穂

木漏れ日のやうな付合ひ賀状くる
初春のミャンマー料理青菜かな
食堂にストール外す美大生
寒星や時のへだてし人のこと
土器はみな無銘冬木に雨の降る
前生前号正誤も後世もうやむや蓮枯るる

喰積

白金東亜未

喰積やをの子の好きは卵焼
先づ二ツと柳眉引かむぞ初化粧
肝斑に雀斑伴侶初鏡
犬駈けし枯野呑み込む入日かな
肩揚はそのまま絹のちやんちやんこ

一月

四日市 長崎桂子

寒の内田畑の色はビニール色
寒きびし今朝も目覚めをもたつきて
声ひくくゆるゆると坐す春隣
老いて手をつなぐ野道や日脚伸び
散らかして客の帰りぬ日脚伸び

てのひらで目から鼻撫づ冬の暮	佐藤喜孝
行く年の公園ゴスペルわきおこる	長崎桂子
置き去りにされし自転車冬の雨	早崎泰江
みかん山トラックころげ落ちたりと	藤野寿子
ジーンパンの膝ぬけてゐる寒の入	堀内一郎
鳴門巻入りが支那そば年の市	森理和
犬も居て貸農園の焚火かな	山莊慶子
煮つまりし色に木しゃもじ薩摩汁	吉成美代子
十二月起きてみる夢ただひとつ	吉弘恭子
北吹きて円了旧居霊界に	赤座典子
マンダラの塗絵にはまる冬りんご	安部里子
半生を手仕事で生き黄水仙	遠藤実



前月作品

くつさめを大きくひとつ飾売
金星が頑張ってるクリスマス
裸の木随まで見ゆるレントゲン
鯛焼の屋臺の前の小學校
話の種は政のみ鍋料理
冬ざるる折鶴の嘴折りてより
神馬駆け秩父夜祭団子坂
独り言聞かれたかしら菊に水
生霊と猫の睦める冬日向
枯蓮の隙間の水のとろとろと
鎌鼬天狗も松もなくなりぬ

鎌倉喜真恵

木村茂登子

篠田純穂子

芝 岡子子

芝宮須藤摩子

定樞じょうすう

須賀敏敏子

鈴木多枝椽子

竹内弘弘子

田中藤穂穂

東 亜未未

喜喜彦抄



二月作品より

王岩・佐藤喜孝

日の本は白浪をもて縁どれり

佐藤喜孝

日本は東アジアの東方又は太平洋の西部にあり、周囲を海に囲まれた島国である。領土は本州・北海道・九州・四国などから成り、全体として弧状列島を形成する。

周囲から打ち寄せてくる浪が、まるで日本列島を白く縁取ったかのように、「うまし国ぞ」と、日本国を掛軸に収めた句作である。表具を生業とする作者ならではの発想であろう。この句は作者が想像上、日本の上空高く舞い上がり、島国を地図的に見下ろしてはじめて活写し得たのであろう。

舒明天皇が香具山に登って国見をされた時の御歌が『万葉集』に載せてある

大和には 群山あれど とりよろふ 天

の香具山 登り立ち 国見をすれば 国
原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ
うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は

江戸時代の蕪村も稲妻が激しく明滅する瞬間に浮かび上がらせた日本列島を句中に表現した稲妻や浪もてゆへる秋津島

蕪村句の雄大さと較べてみると、「日の本は白浪をもて縁どれり」は、日本列島を矮小にとらえた表現だと言えよう。日本列島を掛軸に見立てるといふところに詩心が光り、日本国を愛しむ心情も溢れる。

置き去りにされし自転車冬の雨

早崎泰江

置き去りにされた自転車の上に、冬の雨は寒々と降りかかる。これはどの駅でもよく見かける風景であろう。持ち主が乗ってきたきり、

置き去りにされた自転車の運命を思うと、「冬の雨」との取り合わせは、考えさせるものである。

冬つらら竿に揺らめくベビー服 山莊慶子

冬ではあるものの、麗らかな日差しは暖かそう。庭先の物干し竿の上にはベビー服が鮮やかに揺らいでいる。なんと微笑ましい光景であるう。

少子化が深刻になりつつある日本では、このような光景がいつばい見られるといいね。

夜光杯月のまどかを酌む初秋 吉弘恭子

夜光杯とは、中国の祁連山脈から切り出した玉を研磨加工して作った杯である。原石を薄く薄く削り出して作るので、明かりに翳すと、一つ一つ違った黒や緑、黄緑など複雑な色合いの模様が浮かび上がる。月明かりの中、薄つすら光り輝くことから、「夜光杯」という名がつけられたとのこと。唐詩人の王翰はその詩「涼州

詞」の中で、次のように詠んだ

葡萄美酒夜光杯、
欲飲琵琶馬上催。
醉臥沙場君莫笑、
古來征戰幾人回。

葡萄の美酒夜光の杯飲まんと欲して 琵琶馬上に催す

醉ひて沙場に臥す 君 笑ふ莫れ
古來 征戰 幾人か回る

俳句は、新秋のころ、まんまるに輝く月のもと、夜光杯を手に一献を傾ける情景を詠んでいる。その夜光杯の中に注がれたのが、やはり葡萄酒だろうと思う。というのは、私の中では、夜光杯と相性の合うものが葡萄酒でしかないと考えているからである。

数へ日やなすべきことの目白押し 鎌倉喜久恵

日数の残りも少ない年の暮れ、大掃除や年賀状などであれやこれややっておかなければならないことがいっぱい有り過ぎて、どことなく忙しい雰囲気が漂う。

冬菊の白さ目に沁む別れかな

芝宮須磨子

「友逝く」という前書きのある五句の第五句。親しく付き合った友人を十二月に亡くした。真つ白に咲く冬菊は清らかで印象的で、まるで故人の情操を象徴するかのよう。

話の種は政のみ鍋料理

生前、話の種はいつも政治に関するものばかりで、国家の未来を想っていたその友人。

のり越えた幾つもの冬思ひ新た

病魔におかされてから、強靱な精神力で厳冬を何回も乗り越えたのに、何故、今冬幽冥界を異にされたのか。

一筋に生きた友逝く冬の菊

故人の人生の縮図を、寒さに負けずに咲きつづける冬の菊に見据える描写は印象的である。

うしろ手を祖父に做ふよ冬日向

定梶じょう

祖父の後ろにその孫もヨチヨチとついて来る。ほら、面白いことに、祖父の真似をして、同じくうしろ手を組んでいるその孫……あどけない笑顔、ユーモラスな仕草。どこか日光のよく当たる公園での所見であろうか。

独り言聞かれたかしら菊に水

鈴木多枝子

庭先に大好きな菊花が咲いている。独り言をしながら、その菊花に水をやるのは楽しみの一つである。まるで菊花に話しかけるような独り言は、誰かに聞かれたのかしら……

冬めくや己が背中曲り癖

遠藤 実

いかにも冬らしい季節になった。寒くなるにつれて、ただでさえ猫背勝ちな己が背中曲りは、ますます曲がったような感じ……。自嘲の口調による作者自身の自画像であろう。

雪のせて枯枝とリス絵になる旅

堀内 一郎

葉っぱを落とし尽くして立ち尽くす枯木、枯枝の上に白く降り積もる雪、顔をひよつと覗かせる黄褐色の栗鼠、自ずから成る一幅の風景画。旅先で嘯目した風物であろう。(以上王岩)

煮つまりし色に木しゃもじ薩摩汁

吉成美代子

薩摩汁を知らないので調べる。「昔、薩摩藩では土気高揚のため、鬪鶏が盛んに行われていましたが、負けて死んだ鶏を使って武骨な男性が手っ取り早くできる野戦料理としてあみ出したのが薩摩汁です。薩摩鶏・桜島大根・ゴボウ・人参・こんにゃく・シヨウガ等を煮込んだ栄養味豊かな味噌汁」とある。しゃもじの色に芽をとめたところがおもしろい。よく観察をしている。元々そういう素材の色のしゃもじかも知れないが、木しゃもじも一緒に煮詰った感じがし

て、郷土料理らしい。木しゃもじの「木」、はじめ気になつたが読んである内効いてみると思へてきた。

枯蓮の隙間の水のとろとろ

田中 藤穂

隙間と言つても枯蓮ともなると、隙間だらけである。日が差せばあまねく水面に達する。流れもないので塵も泛いてゐるかも知れない。無風状態だと

まはがねの水引つ張れる枯蓮

神蔵 器

であらうが、掲句は水鳥の遊ぶ故か、ゆつたりとうねつてゐる感じ。睡魔に誘はれさうな句である。

枯蓮やちらばる水に日のひかり 南うみを

(以上喜孝)

新橋界限

芝 尚子

汽車の煙冬の
新橋ふと匂ふ

お召列車のしるし
鳳凰冬温し

新橋変容汽笛
一声の碑に冬日

今はなき汽車は
模型に冬日浴ぶ

292

冬うらら豊かに光る隅田川

ビル街の紅梅一輪手を添へる

四十二階いざ言問はむ冬の橋

冬日向今にのこれる佃煮屋

若き日に

空襲や駅舎に父母と冬ひと日

朝まだき寒き避難の人汽車に

近世俳諧と漢詩文 拾七

王岩

気力なきは風のこゝちの柳かな

休甫

休甫は津田氏。文禄三年（一五九四）頃〜明暦二年（一六五六）頃。別号に江斎・谷之坊などがある。俳諧は貞徳や重頼と交わり、近世大阪俳壇の草分け的存在となる。井原西鶴の作家人生に影響を与えたと見られる。問題の句は『犬子集』に見え、その表現は白居易の「府西池」に由来した。

柳無気力枝先動、

柳 気力無くして 枝先ず動き

池有波紋氷尽開。

池 波紋有りて 氷尽く開く

今日不知誰計会、

今日知らず 誰か計会するを

春風春水一時来。

春風春水 一時に来る

この七絶は『千載佳句』には起承句が、『和漢朗詠集』には全部が載っているので、早くから日本人に親しまれた漢詩の一つに数えられよう。貞門の俳人たちは好んで起句の「柳無気力枝先動」といった、早春の柳を描く表現を生かして、多数の作品を詠み残している。

気力なしと誰かは見ましこぶ柳

無記名『犬子集』『昆山集』

気力なふてほそきや脈の糸柳

如貞『昆山集』

気力なき柳はぢいかうばざくら

保友『昆山集』

秋は猶柳の気力落葉かな

一正『犬子集』、無記名『昆山集』

小町の絵に

艶にして気力なき様や柳髪

季吟『続山井』

気力なき柳のこぶややせぢから

捨『続山井』

気力なし幽霊すがた青柳

才乙『おくれ双六』

条は先柳の気力落はし子

『時勢粧』

貞門の俳諧選集から、これらの用例をアトランダムに見つけることができた。何れも機知を銜う、掛詞を巧みに生かした言語上の遊びに始終した作品ばかりである。

休甫

酒もりの座にて

むさし野もさぞ一盃の朝霞
とけにくきつらゝをはるの日影哉
春雨は柳の髪の毛の油かな
春風にこそぐられてや花の笑えみ
ふきちらすいろこや花の桜鯛
詠て折や比丘尼の鑰かぎわらび
着るは山の錦の色も朱買臣
於丹州
つれづれをすさむたんばの粉雪哉
雪も今いそがしぶりをしはす哉

あを吟行会のお知らせ

四月 春の海吟行

吟行地 御宿

日時 4月21～22日

日帰り可能です

申込み〆切 4月14日

申込先 吉弘恭子 03 3371-4623

五月 両国界隈吟行地 御宿

日時 5月17日

詳細未定

二〇〇八年度

あをかき賞五句

竹内弘子 選

散り松葉猿の腰掛かくれをる

吉弘 恭子

早春の一日、目黒にある広大な旧官邸の跡、空を覆わんばかりの大樹の葉という葉は落ち尽し、池の底に打重なり、その上を赤黄に染め分けて緋鯉が泳いでいました。

池の傍の木の幹に、半月形に生えた棚状の「猿の腰掛」を目にとめて、かるいおどろきとともに「かくれをる」という擬人法がひらめいたのだと思いました。

母に似た人に会ひけり春彼岸

鎌倉喜久恵

先年百五歳の御母堂をなくされた。ご長寿で健康であつても、いつか看取りになつてゆくのでしよう。物静かでふんわりとした作者から、そうした看取りの気負いのようなものは全く感じられなかった。そこはかとなく永訣の氣息がうかがへて心にしみる作品です。

この杭の山羊を結はへし明易く

定梶じょう

何らかの理由で赤ちゃんに母乳を与えられないとき、粉ミルクや牛乳もなかったころ、一頭の山羊の乳を結えておいて、草を沢山食べた山羊の乳を搾つて赤子に与えたときいたことがあります。山羊を結えた杭が

残っているのでしょうか。

ゆるやかな手振り佃の盆踊

芝 尚子

明暦の大火で消失した西本願寺を再建すべく、海に近い葎の原の埋立て工事に貢献した佃島の人達が、御堂の完成を期に始められた盆踊だそうです。

近年テレビなどで広く知られ東京都の無形文化財にもなっています。櫓の上で坐ったまま単調な太鼓を打ちつづける老人。スピーカーから流れる抑揚のほとんどない踊歌。またの名を念仏踊といわれる所以です。

まことに「ゆるやかな手振り」で踊の輪が少しずつ広がっていきます、むかし、「東京音頭」や「炭坑節」の賑やかな踊の記憶しかないののでめずらしくいつまでも見ていました。

大川の傍に、新しい葎を編んで囲った無縁仏が設えられ、並んでお参りしてきました。

本買ふか飯を食はうか昼の蝨斯

篠田 純子

一見長い年月この道（俳句）に親しまれたい男の人の俳句のようですが、純子さんの手練の一句です。「昼の蝨斯」などなかなかいえません。ここかと思えばまたあちら。何でもやってみる事です。

あをかき集 堀内一郎選

(六人目以降五十音順)



吉弘 恭子

冬瓜の豚のはだへに似るよすが
石階の枯葉のひびき海馬まで
冬紅葉風を待ちある容して

定梶しろう

金星をすこし手繰りて月欠ける
車椅子枯葉もうごく日のなかへ
経聞こゆ妙法蓮華竜の玉
地方自治とは霰ふるトタン屋根
ごみ捨てに出るや年内余白なし
複雑な機械積みをる初荷なり
襟立つる雑沓にひてひとりなり
枯木星廻るネオンの字がとまる
夢切れし闇は冬なりがらんどう
枯葉沼に仮眠の鴨のひかりあふ
沼の光げひきつめ枯るゝ草の群
末枯の逆風に來る胸温き
歌留多とり付添孫の鬨志満々
名札背に廻して老ら歌留多とり
行商のあねさまかぶり寒の紅

渡邊 友七

藤野 寿子

かはたれ時生身のうちは寒の紅
野水仙海風に爪立てらるる
初芝居露見かぢかの美人局
大旦生きてゐるのが嬉しくて
新橋裏歩める冬の孕猫

篠田 純子

毛皮店閉店セール素通りす

新型風邪予防のちらし知事笑顔

落葉踏む忘れたきこと踏みしめる

寒き夜金魚の明りつけしまま

丹念に新聞読むや寒の雨

道ゆくにマスクの会釈多くなり

ともかくも春を迎へておぼつか

懐かしきタカラジェンヌよ春の宵

雪催見えないものをみつめてる

待ち侘し嬉しき知らせ寒もどり

成田屋とかけてみたしや初芝居

初芝居張り切る若手噺れ声

齋粥八順過ごす丑の母

寒の風おのろけ豆に手を伸ばす

山茶花や腹いっぱいの蕎麦を食ふ

長閑なる診察台でラジオ聞く

一心に独楽たたかはず三世代

リストラの嵐すさまじ寒の空

早崎 泰江

寒の雨昼に点れるシャンデリア

風花やミルトジャクソン小気味よし

良妻も賢母も難し寒卵

せつなしとバツハを聞く子日脚伸ぶ

露の臺包む新聞株式欄

饒舌も角取れ寒紅薄くなり

冬ざれや砂漠の海に釣の竿

行く年の日数かぞへる爺と孫

てのひらに熱をとらへて風邪心地

風邪心地いつもの蒲団重たくて

寒稽古剣士浜辺を駆け抜ける

姐の海鼠は覚悟ある如し

ままごとのやうなおせちよ一人分

おごそかに半歩一步の初詣

初雪や百歳はもう夢ならず

日向ぼこ話相手の欲しくなり

S Lの足下にあり復飾

赤座 典子

遠藤 実

鎌倉喜久恵

森 理和

吉成美代子

木村茂登子

斉藤 裕子

強がりの本音もこぼす濁酒

濁酒黙って本音を聴いてをり

父の夢母に電話す冬の朝

風の冷や冬芽の命けなげにも

寒鴉水の中から飛び立ちぬ

あらたまのなす事も無く猫あくび

お榊に松を加へてお正月

女正月薬師参りの二人づれ

一人居て風呂あふれさせ寒の入

煮凝や到来物の魚の目

宝くじ結果そのまま大晦日

就職の願ひの絵馬や春待たる

侘助や景気変動追ひ付けず

出初式航空公園梯子立つ

振袖の車椅子押す成人式

流木の着いたるままに冬の浜

山茶花や車過ぐるたび散りにけり

山茶花の垣のうちより子らの声

白粥の熱きを吹きて風邪予防

七草の御形とはこべ庭に探す

のびやかに一人の暮し冬芽出づ

海鼠嚙む和服の父も昭和の日

兄妹墓は別々寒椿

S Lの広場真四角寒九朝

紅梅が咲いているよに付いてゆく

菊紋の花弁十六去年今年

磨かれし窓に向き合ふ初厨

ぱらつきてなにはなくとも冬帽子

親と子の好みの花を小晦日

嘆かはし事多すぎる世除夜の鐘

何日も過ぎて私のお正月

田中 藤穂

東 亜 未

長崎 桂子

須賀 敏子

芝宮須磨子

芝 尚子

鈴木多枝子

一句燦々

かはたれ時生身のうちは寒の紅

純子

早暁、夕暮れは一日の終始。世のしがらみも見え
る。健康で生きていこうちは、身だしなみ大事の女
の一生。「大旦…」も同根、生命大悟の目出たさで
ある。

冬瓜の豚のはだへに似るよすが

恭子

冬瓜の巨大さはグロテスクで確かに豚の肌を感じ
る「よすが」の古格もオカシ味を包んでいる。

襟立つる雑沓にゐてひとりなり

じょう

自身とと思うが街頭でも拾える風景。冬への気構え
が濃く打ち出されて、ともすれば孤独感に襲われる。
「ひとりなり」に決意も漲る。

沼の光げひきつめ枯るゝ草の群

友七

「変哲ない静寂境であるが大自然の小さき生命に
見入っている。かくて作者と草群生の息吹が行き来
し始め枯れの明るさに立ち尽くす。「光げ」「枯」K

音の踏韻も決め手になった。

毛皮店閉店セール素通りす

寿子

世界的不況の祟り飛ばつちりである。私も商売柄
この数年クリーニング依頼は僅か、従つて閉店に追
い込まれる。贅沢に着飾る気分になれぬのだ。

落葉踏む忘れたきこと踏みしめる

泰江

一年に忘れたき事は沢山ある。せめて落葉に置き
換えられれば、これに越した事は無い。空しくも頑
是なない仕草ではある。

ともかくも春を迎へておぼつか

のり子

そうは言うものの、くよくよは無い。宝塚、タカラ
ジェンヌなど好奇心も健在、案外樂觀的である。

齋粥八順過ごす丑の母

理和

十二に八を掛けて九十六歳、すぐ白寿ご立派と言

える。

きのうも地域の演芸会があつて、九十七の女性が日本舞踊を踊つていた。せいぜい母上を大事に。

初芝居からは作者の気分転換を思う。

山茶花や腹いっぱい蕎麦を食ふ

美代子

表現は力強く「腹いっぱい」と限界は心得て居る。「いっぱい」では月並。中七で残る作品に。

良妻も賢母も難し寒卵

典子

常に貞淑は骨が折れるようである。お相手も理解はあるが、ストレスが固まって寒卵の孤立感へ。

横文字の三句、他の作に比べて体温は評価するが一割方損をしている。

饒舌も角取れ寒紅薄くなり

実

年の功で丸くなったのであろう。急に控えめでも何処か悪いのではないか等、と端は心配もする。

うるさい位が花のうち。

風邪心地いつもの蒲団重たくて

喜久恵

体調で重くもなる。或は少なからず老化現象である。本復を祈る、環境に恵まれているから渚、海星海鼠が癒してくれるだろう。

初雪や百歳はもう夢ならず

茂登子

一般に寿命は延びた。この夢は実現可能かも知れない。「おせち」「日向ぼこ」「ランナー」の彩りに作者の希望の火が見える。

強がりの本音もこぼす濁酒

裕子

表面は頑固だが酒には弱い。突っ張りが、ほどけるのだ。さっきの貞女とは逆の立場でリラックス。案外男性とは他愛ないもの。

あらたまのなす事も無く猫あくび

尚子

「なす事も無し」とは心配の無い事で自身でもあ
るようだ。猫とふたり無事息災の迎春である。

一人居て風呂あふれさせ寒の入

須磨子

一生の事をなし遂げた自在境にある。猫あくびに
似て羨まし。「寒の入」節目を語り「あふれさせ」
に胸中の謳歌が聞こえてくる。

振袖の車椅子押す成人日

敏子

車椅子に坐すのは振袖姿か、不自由にめげず成人
の日集いに参加するのであろう。懸命に生きて行く
姿は美しく、思いに任せぬこの世を象徴して居る。

流木の着いたるままに冬の浜

多枝子

流木が静かなたたずまい。禍の無い風景が平和を
奏でて居る。それに引き替えて、この頃のごたごた
は。「白粥」の作「風邪予防」は風邪で締る。

兄妹墓は別々寒椿

藤穂

みな同じのだが改めて、言われると考えてしま
う。同じ血筋でありながら別れ別れになる運命では
ある。寒椿が血族の結びつきを紅々と灯す。

磨かれし窓に向き合ふ初厨

東亜美

暮れのすす払い、拭き掃除で綺麗になつて居る。
男性にはない趣、生き甲斐が感じられる。寒九の豆
腐屋笑顔の計らい、寒暖の救いは効果。

親と子の好みの花を小晦日

桂子

注連飾りなど一夜飾りは忌むと言われ、このよう
な時うちでは花も用意する。小晦日は、大晦日の前
日陰暦十二月二十九日の称とある。晦は暗さを言い、
花との明暗がこの作を揺るぎないものとした。

一月の句会

傳 中野区 カフェ傳

日当りは風も当りて冬桜
 美しき登ガン物質節料理
 ていねいに物言ふ職人冬帽子
 賀客あり饒舌の我ありにけり
 木洩れ日のやうな付合ひ賀状くる
 雨滴今春芽と同じ色となり
 三日はや終日寡黙にハーブティ
 水上に散らばる氷片再氷結
 話初研修女医と患者様
 喰積やをの子の好きは卵焼
 読初めは去年の葉のところから
 良妻も賢母も難し寒卵
 大旦生きているのが嬉しくて
 不治の人見舞うて燃ゆるシクラメン
 いろにせばうすあさぎいろ戀はじめ
 一億がひとつ年取る四方の春
 雪原の罅のごとくに小川かな
 硯海の海にひろがる初日かな
 リストラの嵐すさまじ寒の空
 ガザの地に硝煙消えず去年今年

調 さいたま市岸町公民館

美しき冬空オバマ氏手を振って
 寒紅梅露見まぢかの美人局

綾子 弘子 裕子 尚子 藤穂 実子 須磨子 理和 寿子 東亜未 喜久恵 典子 純子 寒林 木枯 喜孝 敦子 恭子 美代子 敏子

愛犬の真赤な胴着冬木立
 冬朧をそつと包みて青き空
 美声には遠くなりたる歌留多取
 亡き祖母を呼び美しき真洗ふ

あを吟行会

新橋界限

高樓やときをり冬の隅田川
 「愛の像」寒の水にぞ打たれける
 出土せる大き土瓶や雪催
 冬の空いくさは遠くビル群
 玉木屋は母のつくだに冬の梅
 冬霞哈爾濱間の特急票
 冬の駅のびして欠伸して巡査
 停車場てふことばなつかし冬の旅
 万両の実の落ちたよに藪柑子
 言問はむ鳥あらず冬の川流る
 二重廻しの黒き人々鉄道史

七座句会

中野区・小川苑

老どちが頬桃色に年の酒
 寒星や時のへだてし人のこと
 小半時立つてゐるだけ蜜柑の木
 寒の雨細波紋小さき羽毛
 金星をすこし手繰りて月欠ける
 場外馬券枯野のやうな風が吹き
 寒灯や午前零時の警察署
 三十三才八十八まで生き伸びて
 かはたれ時生身のうちは寒の紅
 孫の着る昔の絹のちやんちやんこ

藤穂 慶子 弘子 友七 喜孝 東亜未 典子 寿子 京子 綾子 恭子 茂登子 裕子 藤穂 弘子 須磨子 藤穂 大佳 理和 恭子 喜孝 綾子 尚子 純子 東亜未

連句勉強会 未定
 希望者は 佐藤喜孝まで
 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
 カフェ傳 森 理和
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
 岸町公民館 竹内弘子
 (0488-86-3501)

あを吟行会
 詳細は吟行案内で
 七座句会 毎月第4火曜
 小川苑 吉弘恭子
 (090-9839-3943)

今年の新年会は「傳句会」のあと高田馬場「ミンガラバー」で心のこもったミャンマー料理とお酒を楽しみ、その後カラオケといふフルコース。贅沢な一日でありました。句会を途中参加、出句できなかった八田木枯さんに短冊で一句頂いた。

いろにせばうすあさぎいろ戀はじめ 木 枯

「戀はじめ」の新年の新赛季誕生の時に居合せることができた。(呵々)酔った勢いで付け句を試みることにした。

取損ねたるをとめのすがた 喜 孝

きざはしに見ゆ初春の月 純 子

脇は純子さんを採用。

金星に代り火星の輝きて 恭 子

月につづけて金星火星は付きすぎだがご愛敬。

納豆売の遠くにおらぶ 弘 子

以下数句続いたがメモ紙を紛失、残念。

付句と言へば昨年伊藤白潮先生死去のをりの電報に、

雲の峰とて衰亡を免がれず 伊藤 白潮

胸に止りてちぢと鳴く蟬 佐藤 喜孝

としてお悔やみをした。

二月二十一日の新聞に、「日本最古の舟形木棺・弥生

中期あの世への乗り物か」と見出しのある記事があった。我国の政局は、特に責任政党の自民党の有様は目を覆うばかりである。辞任した人のニュースで顔が出てくるとチャンネルを変えると云ふ人もゐた。しかし国民はじつと静観してゐる。誰を信用してよいか分らなくなつてゐるのだらう。役人、教師、医者、裁判官、警官と不祥事だらけである。それを伝えるマスコミも国民は眉に唾をつけて聞いてゐるのだらう。まさに「思身後之身」を思ふべしである。「あの世への乗り物」が現れたこの世は半分あの世だといふ謂なのだらうか。

(喜孝)

二〇〇九年三月号

発行日

二月二十三日

発行所

東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝
竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替

00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。